



涙

作者さんや読み手さんの声は
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

子供っぽいねと笑われるかもしれないけれど
わたしは未だに泣き虫で

誰かを傷つけては悲しくて涙が出て
自分が傷ついては苦しくて涙が出る

何か成功しては嬉し涙が
何か失敗しては悔し涙が

恋が実つては幸せのあまり涙があふれ
恋を失つては胸の痛みで涙があふれる

会えない寂しさを我慢しては一人で泣き
会えた嬉しさを思つてはやはり涙を流す

泣き虫だねと笑われるかもしれないけれど
わたしは未だに「泣かない大人」にはなりきれなくて

泣いてもいいよと差し出されるハンカチは
いつでも少しいいにおいがした

泣き虫なわたしの

側にいてくれるあの人に
今度 ハンカチを贈ろう

なきむしこよし

楽しい×2魔改造♪

俺の仕事はテレビ番組の小道具を作る
こと。今回の依頼は、とあるオカルト番
組で使う、その名も『呪いの人形』。
：ヤラセ？いいえ、演出です。

とりあえず、ヤフオクで中古の日本人
形（当然髪型はショート+ぱつつかとい
う至高の組み合わせ、おかつぱ）を百円
で購入。さて、この娘をどう料理してや
ろうか。

改造するときに良いアイデアを出すた
めの秘訣は、素材を隅々まで舐めるよう
に観察し、想像力を膨らますことである。
早速、衣服を取り払う。

滑らかな肌、着物が映えるすらつとし
た胸、白く透き通り、うっすらと紅をさ
した顔―ああ、もう一体自分用に買つて
おくべきだった。私物だったら胸部に薄
桃色の突起を付け足し、皮膚の内側に柔
らかい材質を付け足し、全体に粘液の質
感を：ああ、手足を切り落として断面を
付け足して、ダルマにするなんてのもい
いなあ。適度に断面から血液を滴らせて
―ん？血液か。恐怖アイテムとして血液
は定番だからな。仕掛けを動かすと頭か
ら血が滴ってくるとか：いや、球の天辺
から液体を流すと軌道がイマイチ分から
ないし、せめてもう少し細い経路から―

しかしかわいいなあ、おかつぱだけじゃ
なくてこの吸い込まれそうな目も最高に
愛らしい―そうか、目からなら。「血涙」
があるじゃないか。これならば起動も安
定するし、なにより王道なだけあってイ
ンパクトも大。

怪奇 血涙を流す和人形！

うむ、バツチリだ。

くりぬいてく目に穴あけてく管刺して
くトマトジュースのパウチをつけてく隣
にポンプとエアバックく電源足したらあ
つという間に呪い人形でできあがり！

ああ、俺って天才。さっさと納品して
もう一体購入するか。

収録が無事終わったのだろう、上司か
ら電話がかかってきた。いつも通り賞賛
の言葉に違いあるまい。

「いやあ、キミ、いつもながら凄いいねえ。

おかげでいい絵が撮れたよ。」

「いったいどうやって作ったんだい？あ
の仕掛け。」

「おかつぱから、後ろが伸びてロング+
ぱつつかの至高の組み合わせ、お姫様へ
アーになるなんて。よく美のポイントを
分かっているじゃないか！」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
あれ？

スクラップ

これは今のお話です
小さな小さなお話です
傲慢強欲積み重なった
ガラクタ世界のお話です

車がキイとなきました
空飛ぶカラスになきました

「僕はオンボロ捨てられた 昔はぴかぴかだったんだ
あんなに大事にされたのに どうして直してくれないの？」
カラスはつんと答えます

「君はただの機械だよ 人にとっては道具もおなじ
君みたいな古い奴 見向きもしないの当然さ」
そのままカラスは飛び去って
残るは車ただ一台

ついに車の番が来て
ぐしゃりと無残につぶされた
透明オイルあふれるけれど
誰もそんなの見やしない

車がギイと泣きました
それは最後の断末魔

リサイクルだ
生まれ変わると信じていたのに
哀れ体は海の底

オイル 汚染
涙はいずれ罪となり
人間たちに復讐を

わかってる。そんなこと。私はこういう人間。ずるくて、弱くて、そんな自分がいやで、だから、一人のとき、もの思いにふけて、自分のしたことをあれこれ考えてしまうとき、ほんのささいなことが、普段のなにげないことが、私にとって何か重大な失敗のように思えて、怖くて、逃げたくて、忘れたくて、泣きたくなる。後悔している、恥じている、これまでの自分の姿と重ねたりして。そうね。例えば、あのときは…

告白

あの子の席がなくなっていた。学校やめたんだ。いや、もつと前から、あの子の席なんてなかったようなものだ。こんなに近い席だったけど、私は、ただ、見てただけ。机に書かれた落書きも、なくなった上靴も、配られなかったプリントも、私には関係のないことだから。私はかわいそうな目であの子を見るの。

一度だけ、あの子と関わってしまったことがある。試験の日、あの子は筆記用具がなくて、何もできなくて、困っていて、何も知らない先生が私に貸してあげてくれというから、シャーペンを貸してあげた。先生にとって、それに、あの子にとってであっても、私はいい子じゃないといけないから。でも、あとで、あの子に「ありがとう」なんて言われて、返されても、私には人間のふりをした妖怪か、はたまた、色を塗られ、表情を作られたマネキン人形のように、ただ、微笑むことしかできなかった。あの子が行った後、友人が私を見るから、ペンをハンカチでふくまねなんかして、また、不気味な笑みを浮かべて、それから、なんて言っただろう。あの子のこと。…もちろん、おぼえてる。忘れたいだけ。

私は誰にとってもいい人でいたいから。今もそう。もし、私が死んだら、家族は、先生は、友人は、私のこと、なんて言うだろう。素直で人の気持ちがわかるやさしい子って？ まじめで成績優秀な優等生って？ トレンディーでおしゃれなかわいい子って？ そうやって隠してきただけよ。誰も私に触れられないように。誰にも私の中をのぞかれないように。ずっと、人の目を気にしながら。誰も私のことをわからない。わかってほしくもないし。…バカみたい。一人になると思考が止まらない。許してよ。私はそんなに強くないの。もういやだ。いや、いや、いや。何も考えたくない。

自分がきらい。でも、自分が大事。だから、私は、他の誰かのためじゃない、自分のための、罪悪感から、自己嫌悪から、自分を守るための、くだらない、醜い自尊心を守るための、卑怯で、臆病で、軽薄な涙を、一人のとき、誰もいないとき、ほんの少し、まぶたが濡れるくらいに、うつすらと浮かべて、そのときだけ、ほんのわずかな間だけ、誰も助けてくれない、かわいそうな自分を許すの。

いつものこと。意味のないこと。明日になっても変わらない。わかってる。そんなこと。わかってるけど……それが、つらい、の。

あなたのかわりに。

全部、話し終えた。

いざ今まであったことを口にしてみると、想像以上に短い時間で済んでしまった。

（何時間かけても話しきれないと思ってたのに……）

何が起こったのか、それだけを辿ってみると非常に単純な話だった。

私があれば考えて、悩んで、苦しんだのがひどく滑稽に思えたほど。

（涙なんて出なかった……）

親友の前で大泣きしてしまったらどうしようかと心配だった。

でも、悲しいほど冷静に過去を振り返れた私がいた。

（こんな相談のために呼び出して、呆れられたかな？）

呆れて物も言えなかったのだろう、彼女は黙って話を聞いてくれていた。

俯いていた顔を上げた。

親友の頬には、一筋の涙があった。

——よく、頑張ったね。

今までこらえていたものが、一気に溢れた。

可奈子は涙を流さない。

二月十四日、まだ街行く人が肩をすくめ両手をしまいこんで歩く季節、けれどこの日に限って街は急に明るくなる。店頭を華々しく彩るピンクの装飾、通学鞆に赤い箱を忍ばせ登校する女子高生、なぜか妙に落ち着きのない幾人もの男たち。しかしそんな浮足だった空気のなかにあって、可奈子の顔はいつもおどりの涼しさを湛えて落ち着いている。彼女がスノウフェイスと渾名される、それが理由だ。

その落ち着きはらった態度のせいで、可奈子はなにかと頼られることが多い。友人関係、進路相談、そしてやはり恋の悩み。昨日だって、可奈子は後輩のチョコレート作りを手伝わされていた。可奈子にもしなければならなかったのに、結局そのチョコレート作りが暗くなるまで長引いたので、今日の彼女は少し寝不足気味だった。

「先輩、やっぱりひとりじゃ無理ですよ」

昼休み、待ち合わせに向かうため教室を出た可奈子は、その突然の呼び声に足を止めた。縦に巻かれた髪をふわりと揺らす小柄な少女。昨日チョコレート作りを手伝ってあげた、ひとつ下の後輩だった。「お願いします先輩、告白するの、ついてきてくれませんか？」

まるで室内犬のようにこちらを見つめてくる彼女に気取られないよう、可奈子は心の中で溜息を漏らす。どうもこれは長引きそうだ。彼女の想い人が誰なのかさえ、可奈子は知らないのだ。まずそれを聞いてから、さらにいろいろ準備までしてあげて、もし駄目だったら慰めてあげることもしなければならぬ。正直に言って面倒くさい。けれどスノウフェイスこと可奈子は、そんな内心を欠片も顔にださず、ただ「わかったわ」とだけ言って彼女の手を取った。

「それで、渡す相手は誰なの？」

あくまで真摯に対応しつつ、可奈子は頭のなかで待たせている相手について考える。隣のクラスの、同じ部活の男の子。綺麗だとか美人だとかではなくて、可愛いという形容詞を可奈子に添えてくれた唯一の人。早く待ち合わせの場所に行かないと、優しい彼のことから、この教室まで迎えに来てしまうかもしれない。

そこまで考えを巡らせて、どうしてか返答のない後輩の顔を覗き込むと、その目は可奈子の後ろ側へと向けられたまま硬直していた。

「可奈子、いないから来ちゃったけど、なに？」

振り向くと、そこには可奈子の呼び出した彼がいた。そして後輩の目線は、間違いない、その彼にそそがれていた。ほんの僅かの沈黙のうちにすべてを悟った可奈子は、やはり涼しい顔を保ったまま、後輩の背に手を添えて、そして言った。

「あのね、この子があなたに——」

放課後の空は暗く淀んでいた。

後輩と彼は付き合うことになった。「凄いですね先輩。まだ言ってなかったのに、ちゃんと私の好きな人わかってたんですね」と、可奈子は何度も後輩に礼を言われた。彼は貰ったチョコレートを口に含み、少し恥ずかしげにはにかんでいた。「おめでとう」と可奈子は言って、それから少し微笑んだ。可奈子自身が昨夜遅くまでかかって作ったチョコレートは、通学路にあるコンビニのゴミ箱に捨てた。もちろん涙は流さなかった。これでよかったのよと、何度もひとりで呟いた。

二月十四日、聖バレンタインデイ。けれど可奈子に、雪解けの春はまだ来ない。

ガーディアン

潮風は体を優しく撫で、波はそっと囁く夜の砂浜。

散りばめられた星々の輝きの下、そこに彼女はいた。

その瞳には

大粒の涙。

その姿はあまりにも神秘的で美しく、そして無防備だった。

守ってあげたい。力になってあげたい。

でも僕はどうしても彼女に手を差し伸べることができない。

もし差し伸べてしまったら、僕という存在が干渉してしまったら、

彼女はきっと遠くへ行ってしまう、そう思ったからだ。

だから僕は木の陰に隠れて、彼女に気付かれないようにこのままずっと見守ってあげることになろう。

彼女が卵を産み終えるその時まで。

雫

おおきな悲しみに包まれた君は

静かに　そして

はげしく泣いている

君の目からこぼれおちる　涙

その一滴　一滴が

まるでこの世界をきれいにしてくれる気がして

君には悪いかもしれないけれど

僕はなんだか　うれしくなったんだ

答え

本当はね、もっと伝えたい言葉、たくさんあったよ。伝えられなくてごめんね……

リュウと付き合ってた半年。悪いところも覚えてきたけど、しっかり自分の考えを持つてる所やさり気ない気遣いができる所にますます惹かれた。告白されて少し意識するようになって付き合ってた以前の恋愛とは違ってた確信できた。

でも、私はリュウに素直になれなかった。甘えることもあまりできなかった。

さみしい時は素っ気ない態度をとってたね。でもそれは、そうしたら気にかけてくれるって分かってたから。嫉妬させたくて、部屋で他の男の子と楽しそうに話したりしたこともあったよ。

相談にのってほしい時、辛くて話を聞いてほしい時はわざと溜め息なんてついてた。いつも必ず「どうしたの？」って聞いてくれるもんね。

「オレのこと本当に好き？」ってよく聞かれた。「好き。」って

言ってあげるのが一番良かったはず。せめて「うん。」って頷けば良かった。それなのに私はいつも「急にどうしたん？」って笑って流していた。リュウは少し目線を下に落とすけど、すぐに次の話題を振って、さっきの会話はなかったように話していた。

いつかリュウの気持ちさが冷めてしまうのが怖かった。みんな、「本当に大好き」なんて言いながらも別れていく。私にとってこの気持ちは特別だけど、きつとみんなと変わらないんだろうね。永遠なんて信じてないけど、でも、それでも怖かった。だから、簡単に「好き」なんて言わなかった。別れに備えて一線を引いていた。

友達を優先したり、バイトで忙しい上にそんな態度をとっていた。何度か「もっとオレのこと優先して。」って言われたけど、私はスタンスを変えることはしなかった。

その結果、リュウから別れを告げられた……。リュウの瞳から一筋の涙が流れていた。

いつか来る別れが、今来ただけだ。これで友達と過ごす時間

も十分にできるし、バイトも気兼ねなくできると思った。

日曜日、親友と思いきりはしゃいで遊んだ。でも、その日の夜、一人になると色々思い出してしまい、涙が次々と流れた。

この涙は答え。

私の気持ちの答え。

……まだ一緒にいたい。

でも、リュウには言わないよ。別れ話を切り出すのに悩んだんだろ。うなって分かったから。苦手そうだもんね。今さら言われてもきつと困るから。

リュウのおかげで、好きって思える人と付き合うべきだって分かった。別れてもリュウのこと悪く言ったりしないよ。ありがとうって思ってるよ。

別れ話のときに流した涙は何を表わしていたの？

もしもそれが、「本当は別れたくない。」って意味なら……嬉しいな。

ばいばい哀しみ
さよなら涙

窓の外では雨が降る

ばいばい哀しみ
さよなら涙

僕は十分泣いたから

（大人になつて
泣かなくなつた
大人になつて
泣けなくなつた）

僕のかわりに空が泣く

ばいばい哀しみ
さよなら、涙

いつか寂しくなつた時
僕の背中を抱いてくれ

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	なきむしこよし	9 pt	4 位	0 sp
		しあわせスイーツストーリーなのに、ちっとも読み手の嫉妬を誘わない。それは率直な語り口と、ハンカチという小道具のさりげなさのおかげでしょうか。 タイトルの工夫も効いて、ふうわり表紙ゲット、9 回もプロポーズされちゃって、このしあわせもの！ でした。		
02	楽しい× 2 魔改造 ♪	2 pt	7 位	4 sp
		ペロペロで定着した「魔の 2 番」は TAさんの思いやり ♪ なるほど、じつはほんとにホラーでした、と。 わくわく舌なめずりしながらの改造プロセスの小気味よい描写は、うん、きっと実体験！ 期待通りの避雷針、最多特別賞ゲットで、おまけに今週のイチオシフリーズ大賞もさらいましたね。おめでとう！ 特別賞：今週の避雷針賞 by Sad班(特別賞いくつとれるかなワクワク) / お姫さまへ、アーになる賞 by 包丁班 / 当然髪型は賞ト by くらげ班(うちにはサディストが多いんです) / ンツツパナト賞 by 二丁包丁班(短髪は正義) イチオシフリーズ：「よく美のポイント分かっているじゃないか！」「薄桃色の突起」「ダルマ」		
03	スクラップ	12 pt	2 位	0 sp
		リズム、あざやか。ルビの工夫も意味のふくらみを呼んでGOOD。ことばをシャープに用いる表現が目立った今週の諸作品のなかでも、これは傑出してましたね。 涙をそのままとらえるのではなく、「オイル交換」したウィットも功を奏して銀メダルゲット、おめでとう＆おだいじね。		
		4 pt	6 位	0 sp

04	告白	一挙に噴き出すトークの勢い。怒濤のごとく感情が押し寄せてきて、むしろ息苦しいくらい。シャーペンのくだりの輪郭がくっきりしていて、よけいにコワいです。 イチオシフレーズ：「トレンディーでおしゃれなかわいい子」「自分がきれい、でも自分が大事。」
05	あなたのかわりに。	0 pt10 位0 sp 何が起きたかは磨りガラスの向こう。そうすることで、友情のこまやかさが、大写しになってきます。 「よく頑張ったね」のひとことも、なくてもいいくらいに刈り込まれた省略の美でした。
06	黄昏の決闘	13 pt1 位3 sp 西部劇、転じて、たまねぎ劇。さすがのノリは、余人の追隨を許しません。 それにしても、いったいいくつシリーズ物を置いてゆく気でしょうかね、元鳥専門店さんは。 何はともあれ、おめでとう、金色に輝く「13世紀少年」!! 特別賞：黄昏の決闘Part1賞 by (TT) 班 (続きを次のテーマ「恋」で書いてください) / 畜賞 by Uiro班 (ぶるああああ!!) / 彼はきっと左利き by ONION (もしくはOZHOZ) 班 イチオシフレーズ：「ダンダンダンダンダンダンダンッ」「DAED OR ARIVE」
07	スノウフェイス	12 pt2 位1 sp まちかどロストラヴ。うん、ありがち定番なのだけれど、やっぱり「室内犬」とか細部の描き込みの安定感が、読み味の良さですね。 かなこかわいいよかなこ、みんなの脳内映像を「やなぎはら」の一語がきれいに吹き飛ばしてくれました。 作者さあん、わんてっど。 特別賞：柳原賞 by ゆきだるま班 (素敵な作品なのに……) イチオシフレーズ：「室内犬」
		2 pt7 位0 sp

08	ガーディアン	守る人。ウミガメですか。 その工夫は買うけれど、ウミガメの産卵姿をなぜに「美しい」と感じたのか、フォローが欲しい。 ただ、ミスリードをするだけが執筆意図ではない、ですね。涙を流すのは人間だけじゃないのさ、というメッセージを託したいなら、なおさら、もう少し気持ちの吐露があらまほしい。
09	雫	0 pt10 位0 sp そ、そ、それは、さすがに「君」に悪いだろう、というツッコミ待ちでしょうか。 君への淡い恋心。これでは実る確率低そうな。
10	答え	1 pt9 位1 sp 恋にのめり込みきれなくて、でも未練はたっぷりあって。 揺れる乙女ごろろのかたちです。 ひとり語りならフォントは揃えたかったところ。 特別賞：反省しま賞 by (; ;)班(全面的に主人公が悪い) イチオシフレーズ：「リュウ」
11	無題（ばいばい哀しみ）	5 pt5 位1 sp きれいに歌詞。こんなに文字数少ないのに、しっとりと浸れます。秒速5センチメートルの叙情そのまま。 さすが短文実力派さんの裏表紙でした。 特別賞：フォントがiiiっ賞 by Ra La La La Love song班（みんながiiiっしょ）